

---

# クールな彼氏。 2

零雅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クールな彼氏。 2

### 【Nコード】

N2643J

### 【作者名】

零雅

### 【あらすじ】

完全無欠・鉄壁のクールさを誇る一様あたしの彼氏の新。そんなあいつが風邪引いたあ！？ありえないって！でも、ちょっと様子が変…？

(前書き)

クールな彼氏の番外編です。

「か、風邪引いたあ！？新が！？」

「他に誰がいるんだよ。」

だから、今日休む……」

「ちよつちよつと大丈夫なの！？……つて……」

「ツーツーツーツ……」

「切れてるし……。」

もうなんのなのよもー……！」

あたしの名前は「遊沢 亜雪」

一様だけど彼氏もいて順風満帆に高校生活をゆるーく過ぐす女子高生。

まあ、彼氏といつても登下校も一緒でお弁当も一緒だなんてラブラブな関係じゃないけどね。

でもそれはお互いのことが好きじゃないからとかじゃなくて…。

いや、もしかしたら好きなのはもしかしたらあたしだけ？とか、

よく思うけど…。

色々あった結果前よりはましになったと思う。

それでも変わるわけが無いのが彼氏「神庭 新」のクールさ。

言い換えれば冷たさ。

特に特に特に！！あたしに冷たいのは今も昔も健在で。

少しは改めろ、とか思うけど。

そんな新が風邪引いたあ！？

あの完全無欠に風邪なんて症状があるとは…。

ありえないって！！

突然の電話を廊下で受けたあたしは、またもや突然切られた電話に大混乱していた。

「ちょ、亜雪騒ぎすぎ!」

「だって新がつ…!」

「はいはい、のろけなら教室で聞くからね」

あたしの親友で姉御肌な「美桜 柚奈」に腕を引っ張られながら

しぶしぶ教室へと入った。

「で?どうしたのよ」

「新が風邪引いたって…」

「はあ!?あの新君が風邪なんて引くの!?!」

「そう!そこなの!」

あたしもずっと一緒にいるけど新って本当にありえないほど風邪とか引かないの!!

なのに学校休むほどの熱って…。

うあ…なんか心配になってきた。

「じゃあ、放課後はお見舞いに行くわけね」

「ええ！？行かないよ、そんなの！！」

「何言ってるのよ。」

彼女のアんたがいかないで誰が行くって言うのよ。

お見舞いは彼女の鉄則でしょ！！」

いつからそんな鉄則が出来たんだから…。

どことなく楽しそうな柚奈。

…絶対に面白がってる。

「ちゃんと可愛くしていきなさいよー？」

幼馴染っていつても一様彼氏の家に行くんだから」

ああ、やっぱり面白がってる。

この期に及んであたしに可愛い格好するなんて無理に等しいのに。

いつまでも楽しげに語る柚奈を無視して一人ため息をついた。

学校から帰ると、誰かが家の玄関の前で話しているのが見えた。

あれはたぶんあたしのお母さんと…

「おばさん!」

「ああ、お帰り! 亜雪ちゃん」

新のお母さんだった。

あのクールな新とは似ても似つかないほど優しい雰囲気をもった人だ。

「なんだか久しぶりに。最近会ってなかったものね」

「そうだね。」

あれ? おばさんどっか行くの?」

おばさんはちょっと余所行きふうな感じの服を着ていた。

首元にはバッチリネックレスまで。

気合入ってるなあ〜。

「そっなのよ〜。」

これから出かけなくちゃいけないんだけどそれが…」

「そうよ！あんた今日は新君の看病してあげなさい！」

おばさんの言葉を遮って、お母さんが世にもおぞましいことを口にした。

「ええ！！？なんであたしがっ…」

「どうせあんた暇でしょ？」

部活も入ってないし、勉強だってしないんだから」

「そ、そりゃそうだけど…」

新の看病なんていったら絶対にいいようにパシられるっ！

…なのに。

「あら～いいの亜雪ちゃん？」

そうしてくれると助かるわ～」

なんて期待を最大限に込めた台詞があたしに向かって飛んでくる。

「じゃあ決まりね。

実はお母さんも今夜、ちよっと友達と約束があるの。

これで心置きなく出かけられるわ～」

…絶対にそれが狙いだっただ。

「じゃあお願いね」

にっこりといつもの微笑みを浮かべた新のお母さんはあたし達に背を向けて去っていった。

「あたしも早く用意しなくちゃ」

お母さんが楽しげにいそいそと部屋の中へ戻っていく。

はあ…なんであたしが。

お母さんが出かけた後、あたしもしぶしぶ用意をして家をでた。

新寝てるかなあ？

起きてたら絶対にパシられる。

(ピンポン…)

ちよっとどきまぎしながら新の家のインターホンを押してみる。

…誰も出て来ない。

新も出てこないってことは寝てるんだらうか？

でも、そこは幸い幼馴染。

隠し鍵のありかは知っている。

備え付けのポストの裏に貼り付けてある。

そこから鍵だけ抜き取って扉に差し込む。

ビンゴ

扉が開いた。

あたりまえだけど家の中はしんとして静かだった。

新の部屋は二階。

最近はいってなかったからなんだかちょっと楽しみだった。

とんとんとリズムよく階段をのぼっていく。

二階にはいてって一番奥の部屋。

反応が無いのを覚悟で控えめにノックする。

…いいよね…入っても。

ギョッと音を立てて扉を開く。

「うあ〜…」

なんだかちよつと驚いた。

昔からだけど相変わらず綺麗な部屋だ。

あまり物が無くて奥にベットと机が置いてある。

そしてやっぱり…。

「寝てる…」

ベットの上で少しだけ苦しそうにして寝息を立てる新がいた。

あたしはベットのそばにしゃがんだ。

「新ー？」

悪いかなどは思ったけど控えめに新を呼んでみる。

「んん………？」

すると新はそれに気づいた様子で閉じてたまぶたを開く。

「うめんね、もしかして起こしちゃった……って、ええええ！！？」

「亜雪……」

「あつ新君!？」

謝罪の言葉を言いかけたあたしはびっくり!!

新が急に起き上がってそばにいたあたしを抱きしめた。

顔が真っ赤になるのが分かるくらいに恥ずかしい。

と、いうか珍しい。

自慢じゃないけどあの告白のとき以来、こんなことは断言してもいい。

一度も無い。

なのに。

何この状況!？

一人パニくるあたし。

「えっと…どしたの…?」

「別に?」

ふっとあたしを抱きしめていた手を緩める。

そこには顔を赤らめた新。

…もしかして…照れてる…？

んなわけないか、熱のせいだよね。

「あ！そうだあたし、飲み物とか色々買ってきたんだけど、それ片付けてくるね」

立ち上がろうとするあたしに。

「いいよ、行かなくて」

「え？だって冷蔵庫いれて置かないと…」

「いいから…行くなよ」

「う、うん」

なんかいつになく強くものをいう新。

いつもはさんざんこき使ってくせに。

今日はどうしちゃったわけ？

「新、どーしたの？」

「別に」

「嘘だー！絶対に何か…」

「るせえ、何もねえよ」

「む…」

何よ！人がせつかく心配してあげてるのに。

しばらく黙っているとなんだか居づらくなってきた。

やっぱり荷物片付けてこようっと。

「あたし、やっぱり片付けてくる」

「お、おい…」

新の声を聞く前にあたしは部屋をでた。

なんか焦ってるし、そんなにあたしに歩き回らせたくないわけ？

なんかムカついて来た。

少し荒々しく荷物をひっくりかえすと、荷物を片っ端から冷蔵庫や棚へ放り込む。

いいや、のどか沸いたし勝手に紅茶入れちゃお。

新の家に行くといつもおばさんがいれてくれるおいしい紅茶。

確かさつき棚に…。

「あ、あれ？取れない…」

背が低いあたしには届かない高さの位置に缶が収まっていた。

「後ちよつと…うあぁ…！」

倒れる…！！と思った瞬間。

「つたく…危ねえなあ」

頭からもろに倒れる寸前で新が後ろから受け止めてくれた。

その体勢と言ったら…

「あ…りがとう…」

まさにすっぱり新の腕の中。

上を向くとすぐに新の顔がある。

熱のせいかな熱さが伝わってくる。

顔が熱い…。

てか…なんで離してくれないの？

「えつと…」

「ん？」

「あの…離してもらえませんか？」

何故だか敬語になる。

「ヤダ」

「は…？なんで？」

「別に」

さつきからそればかり。

本当にどうしたんだろう？

返事に冷たさがあるわけじゃないんだけど、なんだかよく分からない感じ。

「本当に…どうしたの？新…？」

「何でもない…」

一階は何も暖房が付いてないから寒いのか新はなんだか苦しそうだった。

顔も赤い。

なんなのよ…もう！

「何かあるならちゃんと一言わかんないんだからね！！」

あたしじゃダメかもしれないけど、言えることがあるなら言ってよ！！」

むっとした表情で新に向かって叫ぶ。

「……………かった」

「何？」

はあ、つとため息をついて新が言う。

「…お前に会いたかったんだよ、

言わせんな、バーカ」

「なっ…／＼／＼」

新たな頬が少し赤い。

熱のせい？と思ったけどやめた。

新があたしに会いたかったって言うてくれたのが純粹に嬉しかった。

「…ありがとう」

にこつと微笑んでみた。

キモい、っていわれるの覚悟で。

「それだけ？」

「え？」

帰ってきたのはちょっと思ってたのと違った言葉。

「だって他にある？」

「ふうん」

新は何を言って欲しかったんだろう？

つまらなそうに返事をする。新はあたしを抱きしめていた腕を緩める。

あたしはそこから抜け出すと立ち上がる。

はずが。

「うわっ」

思いっきり腕を引つ張られた。

そして。

「ノーいつごと」

たぶんわざとだ。

いや、絶対にわざと。

ふいにキスされた。

何秒かあたしが固まっていると、わざと音がするよつに唇を離れた。

「分かった？」

久しぶりに楽しげに笑う新。

その笑顔は申し分ないほどに綺麗なんだけど。

「なっなんなのよー！ー！！！」

もうそれどころじゃないあたし。

顔は真つ赤だし、それも含めてなんだかあたしからしたんじゃないのにすごく恥ずかしい。

「あつ新のバカー！ー！！！」

「バカでどーぞ」

立ち上がってくる使途あたしに背を向けると、二階のほうへ歩いていった。

廊下のほうへ行って新が見えなくなるとあたしは頬に手を当てた。

…熱い。

どんだけドキドキしてんのよ、あたし…。

するとまたふいに。

「あ、俺ポカリ飲みたいから持ってきて」

と、顔を出す。

な、なんで気配消してくるのよー！

「顔、冷ましてから来いよ。」

まだ赤いから」

絶対わざとだ…。

「新のバー……カ!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2643j/>

---

クールな彼氏。 2

2010年10月25日13時25分発行